

やまがら

AIが登場し、テクノロジーは日々進化している。林業の世界も例外ではなく、ドローンによる森林調査、衛星データを活用した樹種判別、作業日報のクラウド管理など、かつては想像もできなかった技術が林業現場に入り込んできた。私自身、こうした林業の技術革新の課題に対して関心を持っている。

しかし、実際に山に入ってみると、別の現実が立ち上がってくる。スマホの電波は消える。Wi-Fiも届かない。クラウドは雲の向こうにあるだけである。

山の現場では、LINEもメールも使えない。だが、誰が疲れているか、誰が不機嫌か、誰が今日ちょっと調子が悪いか——そうした情報は、言葉よりも早く、空気を通じて伝わる。通信機器が沈黙する場所では、人の気配が言葉以上に雄弁になる。ふと思いついた。

『山に入ると、スマホの電波は消えるが、人間関係の電波は強くなる。』

調査中、あるベテラン作業員から次の話を聞いた。「木の気持ちになって考えろって、若い子にはよく言うんだ」。あるとき、その場にいた若手から「杉って、日当たりが欲しいんですね」と返された。冗談のようであって、実は核心を突いている。木は喋らないが、育ち方や枝ぶりでは何かを語っている。そしてその“語り”を読み取るには、経験と観察、そして人とのやりとりが欠かせない。

林業現場では、沈黙が多くを語る。チェーンソーの音が響く中、作業員同士は最小限の言葉で動く。目配せ、身振り、ちょっとした間。それだけで、次の動きが決まる。誰と組むか、どんな間合いで動くか、どこまで任せるか——そうした判断は、AIにはまだできない。

もちろん、テクノロジーは作業の効率を上げ

る。それは間違いない。だが、山の仕事はそれだけでは成り立たない。現場で必要とされるのは、機械ではなく、気配を察する力だ。人間関係の“電波”が飛び交うこの空間では、言葉よりも信頼がものを言う。

林業現場は、技術や資本だけでなく、人間関係そのものが経済の土台になっていることを実感する。書類の数字より、現場の一言が木を動かし、人を動かし、結果として地域の経済を動かしている。制度や計画書が描く未来も大切だが、今日の「どうする?」という声が、実際の山を動かしているのだ。

そして、木は急がない。数十年かけて育つ命に、焦りは禁物だ。人もまた、急かしてはいけない。一本の木が材になるまでに、50年かかることもある。その間に、植えた人は世代を越え、木々は山の

風景に溶け込んでいく。林業は、時間と信頼の積み重ねでできている。

最近では、スマート林業という言葉も聞かれるようになった。ICTやAIを活用し、作業の効率化や安全性向上を図る取り組みは、確かに未来への希望を感じさせる。だが、現場で働く人々の声を聞いていると、技術だけでは補えないものがあることに気づかされる。それは、信頼の積み重ねであり、空気を読む力であり、山に対する敬意である。

山の静寂の中で、小鳥が枝を跳ねる気配にふと目を向ける。人の営みを見守る存在として、彼らは山の時間を象徴しているようにも思える。調査を通じて見えてきたのは、木と人と生きものが織りなす関係性の中に、林業の本質があるということだ。そこには、技術だけでは捉えきれない、柔らかくも確かな経済のかたちがある。

(stray sheep)

電波の届かぬ場所で 届くもの